

日本では集約的土地利用が行なわれているが、本地域でもますます土地利用は集約的になり、河川は河巾をできるだけ狭くし、遊水地をつぶして、利用できる土地面積を広げる傾向がある。河川沿岸低地の土地利用が集約化され人口密度が高まるほど、水害の危険度は高くなり、一方水害に対する安全度は要求されるという問題にぶつかるのである。

伊勢崎地区の農業地理的研究

大 沢 輝 子

調査地域は関東平野の北西端に位し、東京から80数Kmの距離にある地域である。

かかる地域を対象に次の2点を主な研究課題として調査研究を行なった。

①当地域が地方工業都市として近年活発に発展するにつれ、農村地帯の農業に著しい変化が生じてきている。そこで最近における農業上の様々の変化を工業化と農業との競合という観点でとらえ、考察する。

②明治以後急速な勢いで全国各地に広まった養蚕業は、戦後は全くの衰退状況にあるが、群馬県（当地域）では戦前の最盛期ほどではないにしても依然として盛んに行なわれている。そこで当地域において養蚕業が米麦と並ぶ基幹的経営部門として残存するのはいかなる条件によるのであるか。

論文の構成は次の如くである。

第一章 地域概説 (1)調査地域の位置 (2)自然概説 ①地形②気候 (3)人文概説

第二章 工業化・都市化の進展と農業 (1)農家構成の変化 ①農家数の動き②経営耕地規模別農家の動き③専兼業農家の動き (2)農業労働力の動き (3)農業生産の動き①耕地面積の現況と動き②作物別土地利用の変化③土地利用率の低下

第三章 養蚕業 (1)養蚕業の歴史的考察 (2)生糸需要の異変 (3)桑園面積の動き (4)養蚕業卓越の条件 (5)労働力減少に対する養蚕経営の対応 (6)繭の流通

第四章 要 約

前述の①、②について要約すると、昭和35年以降工場の地方進出によって工業化・都市化が進展しつつある当地域では、農業は工業化・都市化に押され、次のような変化をみせた。③農家数の減少、④兼業農家の増大、⑤農業労働力の減少、⑥耕地面積の減少、⑦農作物の選択的拡大、⑧土地利用率の低下など。養蚕業が依然として盛んである条件としては、第一に当地域の自然条件が他の作物に比べて桑により有利であるということである。地域一帯の土壤は、火山灰堆積物、あるいは河川堆積物を母材とするため非常に劣悪であり、加えて気候上は夏の早ばつと冬の風蝕害がある。

こういったことから当地域の畑作物としては、桑が最も適しているのである。第二に以上のような事情のもとでは農業経営として養蚕が最も有利であり、従って養蚕収入が農家経済上確固たる地位を占有していることである。第三に養蚕が水稻作との複合経営や中小家畜あるいは冬作野菜などとの複合経営で、年間の労働配分上、さらに土地・施設・肥料などの面で互いに補完的作用を現実で果していることである。

当地域の経営形態は大別して①米麦・養蚕、②米麦・養蚕・野菜、③米麦・養蚕・家畜の3種類であるが、それぞれ労働配分はうまく行っている。特に②でニラ等の野菜を取り入れている農家では、冬の農閑期が全くなり、年間の労働の均等配分がなされている。第四には養蚕が技術的にも経営的にも農家自身の経営と知恵との上に成り立っており、いわゆる付け焼き刃でない底力をもって発展してきたということである。

伊豆半島西海岸

北部臨海村の地理学的研究

久保田 雅 子一

本論文は、調査地域（伊豆半島西海岸北部臨海村）における産業の明確な地域差に留意し、地域を地形との関連において分類、比較し、更にこの地域差の生じた要因について漁業発達史を通じて考察したものである。以下論文の順序に従いこれを要約する。

調査地域の地形は、地質・傾斜・海岸線の状態等により大まかに次の3地域に区分できる。

A地区 第三紀火山岩におおわれる山地

B地区 第四紀火山の北側斜面

C地区 第四紀火山の西側斜面

この、A、B、C地区はそれぞれ行政区画の内浦・西浦・戸田の三地域にほぼ一致する。従って地形との関連の下に、この3地域の主産業である漁業とみかん業について比較した結果、次のように著しく性格の異なることがわかった。

内浦地区：急斜面が多いためみかん園の分布が比較的少ない。従って兼業農家が多いが、その多くが養殖業を主とする沿岸漁業との兼業であり、半農半漁村の性格が強い。

西浦地区：広大な緩斜地を有するためみかん園が広く分布しており、みかん栽培業が専門的にこなわれている。現在、村民のほとんどが漁協組合員であるが、漁業を営まない。純農村的性格をもつ。